

優秀賞

平和を考え，主体的に行動する生徒を育む公民学習 21世紀へ語り継ぐ地域の戦争体験

愛知県碧南市教育委員会 かねこ金子てる子

1 主題設定の理由

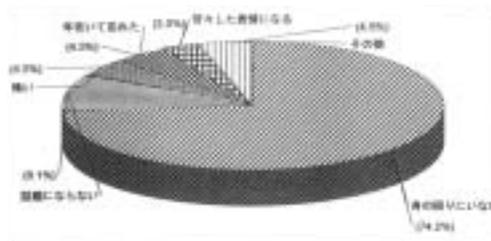
20世紀を振り返って見る時，最大の出来事は，第二次世界大戦だと思う。文字どおり世界中を戦争に巻き込んだからである。

第二次世界大戦では，軍人軍属に限らず民間人もが大量に殺戮され民家も破壊された。一切を消滅させる最低最悪の兵器，核兵器が開発され実際に使用された。第二次世界大戦を契機に武力紛争は壊滅戦となっていった。現在も世界の各地で頻発している武力行使を駆逐することは，世界的な緊急課題であると思う。

1977年に出版され，ベストセラーとなった「ガラスのうさぎ」の新刊のあとがきに著者はこう書いている。「わたしははっとしました。この作品を出版したころは，読者である子供たちのご両親やおじいちゃん，おばあちゃんが質問や疑問に答えてあげることができました。でも今は，大人たちの多くが戦争を知らない世代へと代わりをしてくれています」。

そこで，中央中学の生徒に戦争体験談に関するアンケートを実施した。

戦争の体験談を聞いたことのある生徒は，学年111名中45名であり半数にも満たない。その理由は「あまり話題にならない」6名，「話題にすると苛々した表情になる」2名，「戦争を知っている人が身の回りにいない」49名，「怖い」3名，「年老いて忘れてしまったから」3名であった（資料1）。



資料1 / 戦争体験を聞いたことがない理由

武力紛争を体験しない世代が続くのは素晴らしいことだが，世界的には，そうは言えない。戦争体験談を語り伝えていくことは，市民生活レベルで戦争を語ることであり，私生活レベルで戦争を捉えることである。21世紀を担う現中学生が戦争体験を語り継ぐこの意味は，そこにあると考える。

ところで，公民学習は社会構造を知り，ものの考え方や社会的な行動力を自分で身につけていく学習である。

以上の理由により「平和を考え，主体的に行動する生徒を育む公民学習」をテーマに設定した。

2 研究の目標

本単元において「平和を考え，主体的に行動する生徒」を次のように考えた。

「激動の戦時を生き抜こうとした人々の努力や生き抜くことの難しさを多面的・多角的にとらえ，自分なりに考え，自己との関わりと意味づけ，平和に対する思いを地域社会に発信すること」とする。

平和を自分で考え，行動することができる

中学生を育むには、次の二つの観点が必要であると考へた。

(1) 生徒の意識変革を主眼にした学習過程

平和や生命の尊さを体験的に語れる人が身近にいることに気づき、私生活レベルで戦争と平和を捉え直させることが必要である。

それには、疑問を粘り強く追及し、さまざまな角度から事実を把握し、自分の「思い」を作り上げていく指導が要求される。

(2) 取材活動とメディアの活用とが調和した単元構成

今回改訂された社会科学学習指導要領では、「様々な資料を適切に収集し、選択して」「適切に表現する」能力の育成が求められている。自分の平和への「思い」をメディアを活用して、発信できるように生徒を支援していく必要がある。

以上、二つの観点を踏まえ、目標を明確にするために資料2に示すような「めざす生徒像」を設定した。

3 研究の構想

(1) 研究の仮説

資料2に示した「めざす生徒像」に迫るため次のような仮説を設定した。

平和への興味・関心を喚起する学習過程の設定と課題追究を図るための取材活動を組み込んだ平和学習単元を構想すれば、平和を自分で考えることができるだろう。

平和への思いや感動、心の揺れや高まりを戦争体験記や戦争童話に結実させ、発信することで、平和創造に生かす行動力を身につけることができるだろう。

(2) 研究実践の具体的な手だて

研究の仮説を受けて、以下の手だてを考へた。

ア 平和学習の単元設定

授業に入る前に、生徒に「平和な日本に生きていてどう思うか」と聞いてみた。「平和は当たりまえ」「平和でよかった」「戦争はしてもいい」と答え、「戦争は絶対してはならない」「平和は尊い」と答えることは少ない。さらに「平和のために自分で何かしたいか」と投げかけると、学年の3分の2の生徒は「何もない」と答えた。生徒にとって「日中戦争」「太平洋戦争」は、教科書に書いてある出来事であり、身の回りで実際に起きたことだとイメージできないため、戦争や平和へ興味や関心を持つことも少ないのではなからうか。そこで、本単元では、地域にある戦争体験や資料を生徒が直接入手することで、生徒たちの興味・関心を喚起するようにした。

また、戦争体験者の多くが高齢期にさしかかり、体験談や資料が失われつつあることから、自分たちのできることは何かを問い、平和社会への発信者とさせたいと考へ、平和学習単元「21世紀への贈りもの」(資料3)を策定した。



資料2 / めざす生徒像

平和学習「21世紀への贈りもの」単元構想（12時間完了＋ゆとりの時間）

単元の目標

- ・地域の高齢者から戦争体験談や資料の収集・分析活動と課題追求学習を通して、平和の意義を実感する。
- ・主体的に平和を考え、地域に発信する。



イ メディアの活用

手紙やはがき，FAX，マスメディアなど場に合った手段を考えて用いる。コンピュータを活用して戦争資料の収集・加工・発信をする。

ウ 生徒の思いを重視する問題解決学習

収集した戦時中の写真や軍事郵便，召集令状，死亡通知などは「中央学区に残された戦

時」という課題学習に必要な資料であり，同時に太平洋戦争・日中戦争と自分の生活とのつながりが見える学習教材である。

生徒一人ひとりの戦時への思いや心の揺れを大切に，次の活動への目標や課題を設定し，さらに発展させるため，ポートフォリオを活用する。

A子：アンケートに「平和であることは当たり前」と答え，「戦争を知っている人が身の回りにいない」ため，戦争の体験談を肉声で聞いたことがない。平和への関心，意識を高め，その大切さを実感させたい。家庭にはコンピュータがあり，メディアの知識はあるので，情報収集・加工についての活躍が期待できる。

B男：授業で，黒板の文字をノートに書き写す学習を進めているが，文字の意味を理解できないことが多い。自分の考えを文章にすることもできない。平和学習を通して，自分の思いを表現させたい。

資料4

(3)実践検証の指標とする生徒

資料4に示したA子とB男の様子を追っていくことで実践の有効性を検証したい。

4 授業実践の内容 3年公民・平和学習「21世紀への贈りもの」

(1)戦争の記録を知る生徒たち 「にんげんをかえせ」を知ろう

単元導入で，原爆記録映画「にんげんをかえせ」を視聴した。

視聴後，被爆で命を失った愛知県出身者の名前が刻まれた石塔の写真を教材提示機で見せ，この地域にも被爆者がいることに注目させた。原爆の被害者が身近にいたことに生徒は驚いた。また，このフィルムが市民の手による10フィート運動によって完成したことについて説明を加えた。

多くの生徒はA子のように身近な戦時に興味をもち，10フィート運動へエールを送っている（資料5）。

すごく生々しくて，痛そうだった。目をついそらしてしまうビデオだったと思う。名古屋の学生が動員され広島で被爆したとは知らなかった。（略）

また，自分たちが被害を受けておきながら，お金を1人3000円ずつ出し合って，10フィートずつアメリカからフィルムを買い戻す運動もすごい。

資料5 / 「にんげんをかえせ」の視聴後のA子の感想

このことで，地域にも戦争の事実が残っているのではないかと，自分たちの足でそれらを集めることができるという興味・関心が高まり，次時の地域の戦争資料収集活動に取り組むモラールが高まった。

(2)地域の戦争体験談・資料を収集する生徒たち 「中央学区の戦時を集めよう」の活動

第二時では，「中央学区に残る戦時」をテーマに話し合った。

資料6のB男の発言から，戦時が急に身近な問題に変わり，地域の戦時収集へ発展していった。そこで，生徒が地域の高齢者の方々に「戦争体験談や戦争資料提供のお願い」を出すことになった。

教師 みんなの中央学区の戦時を集めるのにどうしたらいいのかな。
 B 男 多くの知っているおじさんから満州の戦争の話聞いたことがある。
 生徒2 僕のおじさんはやっぱり同じ満州で、戦争中に亡くなったと聞いている。
 生徒3 私のおばあさんも当時、満州にいたという。でもあまりそのことを話したことがない。
 生徒4 戦争に行った人に直接話を聞き出す。
 生徒5 あまり話してもらえないと思う。
 生徒6 戦争中の写真とかはがきとか貸してもらえばいい。
 生徒7 いっせいに「お願い文」みたいに資料提供をお願いしたらたくさんの資料が集まる。
 生徒8 まず、自分の家のおじさんやおばあさんに頼んで、それから、地域の人にもお願いしていけばいい。

資料6 / 第2時 「中央中学の戦時を集めよう」授業記録

B男は、母親の知人が戦争体験者で、幼い頃から話を聞く機会があった。FAXで「戦争体験談や戦争資料の提供のお願い」をし、校区外のTさんにFAXで体験談を送ってもらった。

12月までに、73人、年齢幅は62歳から92歳の高齢者の方々の戦争体験談、戦争中の写真13枚、1人の兵士の軍事郵便15通、入隊の心得3点、死亡通知書5通、満語練習帳3冊、貯金通帳1冊、満州開拓帳1冊の戦争資料が集まった(資料7)。



資料7 / 収集した戦争資料の一部

身の回りに戦争体験者のないA子は、すぐには自分では聞き取りや資料を集められなかったが、満州から家族に宛てた15通のはがきに興味を持ち、その読解を始めた。

(3)戦争体験者に取材活動を重ねる生徒

「平和を追究しよう」

収集した資料や体験談を一人調べで吟味・分析を進めた。この過程で戦後50年に生きる生徒の中に新たな疑問点や思惑が次々と生まれてくることになった。そこで各自の課題を設定し、その課題解決を取材活動を通して行った(写真1)。



写真1 / 戦争体験者に取材活動を行なう生徒

A子もまた、軍事郵便を提供してくれたMさんを再三尋ね、Mさんが碧南に住むようになったのは、1944年12月のことであり、その頃名古屋は空襲が激しくなってきたこと、慰問袋に家庭の写真やエポナイトのひげそりを入れて送ったこと、検閲で塗りつぶされた軍事郵便があったこと、戦後の家族の動向などを聞き出してきた(資料8)。

11月22日

戦地満州からのはがきが15通もある。これが55年も前のはがきかと思うととても大切なものと感じる。何が書いてあるのか。くせ字でこれではぜんぜん読めない。まず、届いた順番に読んでいくことにした。

11月30日

11月というのに既に零下0度、冬は零下30度の寒さという満州。雪が降っても解けない。手はひびやあかぎれで痛くて、今までの日本での生活を温室と感じている。Mさんのご主人の任務は工兵として、道路づくりや軍営を建設することにあっただ。満州第2634部隊の写真を見せてもらった。体が大きく、頑丈で工兵としては優秀だったということだ。はがきに出てくる内地とは日本本土のことで、外地とは満州のことを意味することも分かった。今はぜんぜん違う内容や言葉がどんどん出てくる。

12月7日

慰問袋とは何か、検閲責任者とはどういうことか、はがきがとどころ塗りつぶされているのはどうしてか、Mさんに聞いてきた。慰問袋とは、戦地にいる兵隊さんに、必要な煙草・かみそり・針や糸・手帳・家族の写真などを入れて送ったものだそう。かみそりはエゴナイトと金物があって、金物がよい。また、当時送るために写真屋で撮った家族の写真を見せてもらった。子供のセーターはスカートは全部手作り、新川に疎開してから、毛糸をとるために羊も飼っていたそう。疎開したのが1944年12月、名古屋の空襲がとて激しくなってきたからだそう。当時のはがきは軍の検閲を受けたという。軍に関することは全部塗りつぶされている。プライバシーも何もない。今のようにはいかない。

12月14日

Mさんの子どものことを聞いた。3人の子どもがいて、お腹にまだ1人いたそう。昭和20年3月に新川に疎開してきて、生まれたそう。はがきに男を生んでくれ、子どもをしっかりと育てよ、子どもを可愛がれ、子どもの側で暮らせるのが一番の幸せと思えといつ子どものことが書かれていた。家族を思いながら、精いっぱい任務に励む兵士の気持ち悲しいと思う。結局、捕虜としてとらえられシベリアへ送られてしまってもどることがなかった。戻ってきた人でも戦争で傷を受け、傷痍軍人となった人も多い。亡くなったのは昭和24年で死亡通知が昭和30年の戦後10年してから届いた。遺骨はなく髪の毛一束だけが帰ってきたそう。なんとも言えない気がした。Mさんは今81歳。一人で4人の子どもを育ててきた。今、満州からのはがきは仏壇にしまっている「家宝」だそう。

1月20日

Mさんから聞いた傷痍軍人について母親に聞いた。母親が子どものころは町のあちこちでアコーディオンを弾いたりして、生活資金募金活動をしていたという。でも昭和37年頃で、全部姿を消したそう。習南市戦争遺族・傷痍軍人の会があることをMさんから聞いた。それでその人に傷痍軍人が街角から姿を消した理由を尋ねた。遺族恩給や傷痍軍人の保償金制度が整ったため、募金活動を取りやめるよう厚生省から通達があったという。また、集まった資料の中の石川徳吉さんやMさんのご主人の死亡告知書が昭和30年に発行されているのは、政府がこの年で帰還兵士の決着をつけたのではない。

資料8 / A子の取材活動と課題追究「21世紀への贈りもの」ファイルより

(4)戦争体験者の思いを語り合う生徒 平和を考えよう

この段階で、生徒のポートフォリオを読むと、戦争の事実や因果関係、戦争体験者自身の感想などが詳細に記録されていた。そこで「中央学区に残された戦時」について調べたことを報告し合うよりも「出会った戦争体験者の体験をどう思うか」と問いかけたほうが生徒たちのストレートな思いを引き出せると考え、話し合いを始めた。

資料9のC男のように、実際に中国人へ乱暴してきたことを反対する意見など戦争の理不尽さが多く出された。A子は満州戦地に生きる兵士への思いを語った。どの生徒も自分の言葉で戦時への思いを伝え合い、戦争体験者の戦後の生き様にまで触れている。

(5)平和を発信する生徒 「戦時を伝えよう」、『21世紀への贈りもの』・戦争童話の制作と配布活動

戦争体験者が急速な高齢化をしていくといったE男の意見を取り上げ、戦争の20世紀から、「21世紀に残していきたいものは何か」「みんなの手で平和を伝えていく方法はないか」と生徒へ問題を投げかけた。

自分たちで戦争資料を収集したり、戦争体験者からの取材活動で課題を追求し、解決できたという確信が、集められた資料を発信したいというさらなる「思い」に発展していった。

1月から社会科の授業とゆとりの時間を使って、3年生徒全員で戦争体験談をワープロ打ちする活動を進めた。

次に、生徒は4～5人のグループで戦争童話の制作に入った。動物の世界にたとえた戦争、戦中の人々から見た21世紀の世界、世界平和のみつなど工夫された童話が出来上がった。A子はグループの中心となって「55年前のはがき」と題し、少年がはがきをもとに祖父の知人を尋ね、その兵士(祖父)の心情

B男は、人差し指で1時間に平均15字程度打ち続けていった。打っては資料の文字と違え、削除キーで消しすぎてはまた前の部分から打ち直す。フロッピーに保存したり、読み込むのもファンクションキーやマウスを使わねばならない。決してたやすい作業ではない。今までなら棒を折ってしまうことが多かったB男であるが、戦争を伝えたいという自分なりの「思い」から、皆に読めるような活字に変換するという責任と自分の思いを文字にできるという喜びを持つことができたからこそ「行動」が継続したといえよう。

生徒の思いを重視する問題解決学習という観点からの考察

戦争は遠い大昔に遠い地で起こった出来事というくらいで自分と関係が薄いものだと思っていました。しかし、この編集をすることで、戦争での食糧不足や空襲や出兵などで家族や友達とのつらい別れを経験したお年寄りの生の声を聞きました。そして、戦争は遠く離れた地ではなく、私の住んでいる町でも同じように起こっていたということを実感しました。また、戦争は遠い大昔の出来事ではなく現代の出来事なのです。今も地球で戦争をしているのです。戦争という過ちに気づいてほしいと思います。

私はこの編集で生きているありがたさも知りました。

私たちはこのようなことを今もこれから先もずっと伝えていかなければなりません。そして、戦争の苦しみを味わった人々の期待をうらぎらないように、良い世の中を創らなければならないと思います。

資料13 A子の感想

資料13に示すように、生徒の思いを記した「21世紀への贈りもの」ファイルの蓄積が手がかかりになったといえる。

A子のように平和に暮らせる尊さ・生命の喜び、平和創造をし続けていく責務について書いた生徒は多い。

一人調べや授業で感じたことや疑問などの記述を朱書きで助言を加え、次時に活用できるよう蓄積させていくポートフォリオを活用することで、自分の学習の蓄積や次への課題がはっきりし、平和を主体的に考え、発信活

動へと発展していったといえる。

A子を中心としたグループは15通のはがきをもとに、少年と祖母の語りから戦時へ思いを馳せ、筆まめな一人の戦士の生き方を原稿用紙45枚分につづった。銃後の家族へあてた思いが切々と伝わるものである。

戦争童話制作は、自分たちの収集した資料や体験談から、平和に対する自分の「思い」を自分の言葉で創作していった主体的な行動であったといえる。

地域の方々からは「21世紀への贈りもの」を送ってくださいと要望をいただき、各図書館・福祉施設・老人施設・各小中学校・各新聞社・個人等97箇所へ送付した。感想を31通の手紙やはがきで寄せて頂いた。

「図書館に寄贈して地域の方々に読んでいただきたい」(図書館長)「生徒の手でこれほどの編集ができるとはすごい」(某書店)と評価され、平和発信の一端を担うことができた本中学生であった。

以上の点から平和に対する思いを地域社会に発信できた行動といえる。

(2)課題と今後の取り組み

平和社会について考え、主体的に行動する生徒の育成をめざして、生徒にとって生命の危機が随所に感じられる衝撃的な戦時資料の収集、取材、一人調べ、話し合い、発信などの平和単元構成を通して実践してきた。

そして、生徒の残した「21世紀への贈りもの」や23編の戦争童話をCDに書き込む作業を在校生が受け継ぎ、さらに数百点に及ぶ追加資料を収集し、小学生や障害者の人々も含め、多くの人々に戦争を語り継ぐことを継承している。

さらに広く継承していくために、未だ掘り起こされていない風化しつつある地域の戦争体験・資料を収集し、誰にでも分かりやすく整理する工夫と平和教育に生かす努力を今後いっそう進めていく必要がある。